◎人口問題審議会幹事（官制順）

氏名	現職
森川幹夫	内閣総理大臣官房参事官
橋本徳男	経済企画庁長官官房企画課長
中根正己	外務省移住局総務課長
前川憲一	大蔵省大臣官房調査課長
西村勝己	文部省初等中等教育局初等教育課長
網野智	厚生省大臣官房企画室長
岩本道夫	農林省農政局農政課長
三宅幸夫	通商産業省大臣官房企画室長
細野正	労働省職業安定局失業対策部企画課長

第37回日本社会学会大会

第37回日本社会学会大会は，昭和39年9月26，27の両日，東京都立大学において開催された。一般研究報告は，基礎理論，家族，地域，都市，農村，漁村，産業・労働，集団・組織・リーダーシップ，階層・階級，社会心理・社会意識，社会病理・社会福祉の各部会に分かれて60題の報告があったほか，重点部会として「現代社会学におけるM・ウェーバーの意義」についての4報告があり，シンポジウムとして討議が行なわれた。なお，会長武田良三教授の「産業社会の体制と問題点」と題する講演があった。

報告のうち，人口あるいは人口問題に直接関係あるものとして，次の5報告があげられる。

人口の地域移動と出生力との関係……人口問題研究所　上田正夫
移動人口の社会学的一考察……北海道大学　鎌田哲宏
地域開発にともなう農村の変貌……山口大学　山本陽三ほか8名
経済開発と社会開発——とくに九州諸地域における……長崎県立短期大学　山本文夫
Community Development の問題——東パキスタンを例として……東北大学　佐々木徹郎

本学会最近の傾向として，人口あるいは人口問題に関する社会学的研究は今年度においても少なかったことが惜しまれ，この方面の専門研究者の養成と人口学者との共同研究あるいは討議が望まれる。しかし「現代階級理論と<中間層>問題」（神戸女学院大学　小関三平），あるいは「職業の社会的評価」（統計数理研究所　西平重喜）などの報告は，最近における人口の社会的構造の変化と関連が深く，この方面の研究水準や問題の所在を示すものとして興味をひいた。また，マックス・ウェーバーの意義についてのシンポジウムは，各報告ともウェーバーの紹介に終わった感があって，十分な討論と問題点の追求にまで発展しなかったことは惜しまれた。

（上田正夫記）

第6回日本老年社会科学会総会

第6回日本老年社会科学会総会は，昭和39年11月1日，2日の両日，本大会会長として熊本女子大学学長北村直躬博士の大会運営の下に熊本市九電ホールにおいて開催され，本研究所からは，上田正夫（人口移動部長），黒田俊夫（人口移動部移動科長），河野稠果および内野澄子（移動科員）の各技官が出席した。

一般研究発表として18題の報告があったほか，シンポジウムとして，「老人と精神衛生」3報告，「農村と老人」4報告があり，討議が行なわれた。また，次の3題の特別講演があった。

老人調査の解析と評価……厚生省　村井隆重
生理学からみた老人問題……熊本大学　緒方維弘
老年者の宗教的態度とその規定素因……大谷大学　臼井二尚

これらの報告および講演は次のとおり大きく分けられる。

（1）　社会調査に関するものは3題，ただし，シンポジウムおよび特別講演を含めると5題。

（2）　施設老人の精神的，肉体的障害ならびに生活状況の調査に関する報告はもっとも多く7題。

（3）　老人と住宅の問題について，施設建築計画および脳卒中と室内気温との関係に関するもの各1題（ともに，日本大学　木下茂徳報告）。

（4）　人口学的研究としては人口問題研究所から次の3題。

日本人男子の簡速労働力生命表——昭和35年……河野稠果
老年労働力の動向と構造……黒田俊夫，内野澄子
中高年齢人口の流動性……上田正夫

（5）　その他には，純医学的なものとして「老眼」に関する研究と，老人福祉への寄与としての大学解放に関する報告が各1題。

（上田正夫記）

第19回日本人類学会・日本民族学会連合大会

標記の大会は，昭和39年11月28日から同30日までの3日間，京都市の京都会館会議場において開催され，本研究所からは，篠崎信男（人口資質部長），小林和正（資料課長），青木尚雄（人口資質部能力科長）の3技官が出席し，篠崎・青木両技官は次の演題によって研究発表を行なった。

Neo-Vital Index よりみた主要諸国の人口活力の動向……篠崎信男
日本人の出生力について……青木尚雄

大会の日程は，中間に特別講演（湯川秀樹・桑原武男両氏），各学会総会をはさみ，午前中に人類学部門，午後に民族学部門の研究発表が合計68題述べられた。その概況および印象は次のとおりである。

（1）　研究の内容が極度に分化されていること。たとえば同じ人類学部門において，文化人類学と形質人類学に分けられるのは前からのことであるが，最近はさらに霊長類生態学，組織学，発生学等に細分され，しかも人体生理学一つをとっても血清蛋白の免疫化学や筋電図による疲労の分析など，特異の研究が見られはじめている。

（2）　一方，各部門があまりに狭く深く進む結果，相互間の関連総合ないしマクロ的判断に欠けるうらみが出つつあること。特に分析観察が詳細になっている反面，統計処理法が旧態依然として，むしろ混乱を助長している傾きが見られる。

（3）　人口資質に参考になった演題としては，「個人追跡法による日本人の発育の研究」（東京大学　保志宏ほか），「日米混血児の身長と体重の長期観察」（日本医大　江藤盛治ほか）などがあげられる。前者は，いわば出生コーホート別発育曲線の分析であって，発育の幅および傾向（channel）の変化が，季節差，性差，年齢差について述べられ，後者は，特に混血児における11～12歳の spurt の特異性が明らかにされ興味があった。

（青木尚雄記）